

## ○特別企画ゲスト紹介



### 〈杉原邦夫〉

演出家、舞台美術家。1982年東京生まれ、神奈川県茅ヶ崎育ち。  
EXILE ファンクラブ“EX FAMILY”会員。  
KUNIO 主宰、木ノ下歌舞伎企画員。  
2004年、自身が様々な作品を演出する場としてプロデュース公演カンパニー“KUNIO”を立ち上げる。こまばアゴラ劇場が主催する舞台芸術フェスティバル<サミット>ディレクターに2008年より2年間就任、2010年～12年はKYOTO EXPERIMENT フリンジ企画のコンセプトを務めるなど、持ち前の「お祭好き」精神で

活動の幅を広げている。2006年より“木ノ下歌舞伎”に企画員として参加。2013年に上演した『黒塚』は「CoRich 舞台芸術まつり!2013 春」でグランプリを受賞し、2015年1月より三重、大垣、京都、東京、新潟の5都市での再演ツアーがスタートする。

### 〈木ノ下歌舞伎〉

歴史的な文脈を踏まえた上で現行の歌舞伎にとらわれず新たな切り口から歌舞伎の演目を上演する、木ノ下裕一と杉原邦生による団体。古典演劇と同時代の舞台芸術がどう相乗作用しうのかを探究し、新たな古典観と方法論を発信、ムーブメントの惹起を企図する。あらゆる視点から歌舞伎にアプローチするため、木ノ下裕一が指針を示しながら、さまざまな演出家による作品を上演するという体制で、京都を中心に2006年より活動を展開している。

## ○シンポジウムゲスト紹介



### 〈西川千雅 (にしかわかずまさ)〉

日本舞踊家、西川流四世。

1969年三世家元・西川右近の長男として名古屋に生まれ、6歳で初舞台、15歳で名取。

毎年9月「名古屋をどり」で幅広く1992年NYの美大を卒業後、古典

作品発表の他、アートパフォーマンスなども発表。ミュージカル、歌舞伎、ドラマにも出演。2010年名古屋開府400年式典一部演出。2014年「やっとかめ文化祭」でみちばた芝居「痛快!川上貞奴一座」を発表。「あいち戦国姫隊」などもプロデュース。東海学園大学、愛知淑徳大学非常勤講師。

## 木村繁演出・有島武郎作

### 「老船長の幻覚」1910年作品



◇有島武郎 (ありしまたけお)  
明治11年生まれ。札幌農学校に進学してキリスト教の洗礼を受ける。渡米してハーバード大学で社会主義と遭遇、帰国後は同人誌白樺に参加。明治43年の大逆

事件は作家たちに沈黙を強いたが、有島は戯曲『老船長の幻覚』を白樺に発表、激しい精神葛藤を描く。表現主義的手法を日本で初めて実践した戯曲として名高い。大正12年波多野秋子と心中した。

### ◇作品概要

老船長は、最後の航海に出ようとしている。それは海図にない不安な世界への旅だった。水夫長と孫娘、そして老船長がかつて助けた幽霊たちは、航海をやめろと言うが、かつて老船長に恋した医師の娘の幽霊は航海をすすめる。コンパスも帆柱も壊れたまま、老船長は船出を決心する。謎の両替商が不安を掻き立てる。

### ◇木村繁プロフィール

動く現代美術オブジェクトパフォーマンスシアターや、『ジュリアス・シーザー』など朗読劇の演出に力を注ぐ。2014年演出の人形劇団むすび座『父と暮せば』は「美学的根幹に文案があると同時に、その伝統に反旗を翻す新たな形式を作り上げた」(月刊韓国演劇-韓国演劇協会)「人形劇の発展をもう一段上げた質的勝利」(演劇評論-韓国演劇評論家協会)と批評される。

### ◇出演者

大栗幸子  
岡田一彦(劇座)  
神谷昌代  
祖川詩織  
徳川昌子  
松浦正幸  
youu-ji

## 齋藤敏明演出・岡本綺堂作

### 「鳥辺山心中」1915年作品



◇岡本綺堂 (おかもときどう)  
劇作家、小説家。本名は敬二。元徳川家御家人の長男として、東京高輪に生まれる。幼くして歌舞伎に親しみ、英語にも堪能。新聞記者として勤める傍ら、数々の戯

曲を発表。その後は作家活動に専念し、生涯に196篇の戯曲を残す。二世市川左団次に書いた「維新前後」、「修禅寺物語」の成功により、新歌舞伎を代表する劇作家となる。「半七捕物帳」の執筆としても知られる。

### ◇作品概要

將軍家光の上洛に従って京に上がった菊地半九郎は、祇園で遊女お染と馴染みを重ねた。やがて江戸に帰る日が近づき、家宝を売り払ってでも、お染を身請けしようと考えたが、些細なことから朋輩の市之助の弟・源三郎と争いになり、斬り合いの未殺してしまう。進退窮まった半九郎はお染と共に死を決意し、鳥辺山へと向かうのだった…。1925年、二代目左團次の半九郎、二代目松蔭のお染、六代目寿美蔵(三世寿海)の源三郎で初演。

### ◇齋藤敏明 プロフィール

大学入学後(中退)、演劇を始める。自劇団での劇作、演出等を経て、現在はフリーに。演劇のほか、ミュージカル、オペラ、イベント等、幅広い分野にわたり、構成、演出を数多く手掛ける。最近では、雅楽師東儀秀樹のコンサートツアーの演出等も担っている。

### ◇出演者

ジル豆田 (てんぷくプロ)  
棚橋真典 (劇団サラダ)  
渡辺一正 (劇団スマイルバケーション)  
草野浩之 (劇団スマイルバケーション)  
安藤幸美 (劇団スマイルバケーション)  
東野結花 (劇団パロディフライ)  
鈴木芽依 (フリー)

## 丸知亜矢演出・岡田八千代作

### 「黄楊の櫛」1912年作品



◇岡田八千代 (おかだ やちよ)  
明治から昭和期の小説家、劇作家、劇評家。明治末から大正・昭和初期に活躍した小山内薫の妹。19歳の時に『明星』誌『婦人界』誌に小説を発表。森鷗外の第三木竹二に認められ、

彼の『歌舞伎』誌にも劇評を書いた。また、新派・歌舞伎の公演にも関わり、河合武雄と二代目市川猿之助に頼まれて『芽生座』を興した。戦後は、『日本女流劇作家会』を作り、同会の『女流戯曲選集』、『現代女流戯曲選集』を監修。また、ラジオドラマの執筆、演出など多才に活躍した。

### ◇作品概要

櫛職人の豊之助は、父親の藤平に手上げた妻おつなを家から追い出す。今までになく気に入った出来の鬘櫛を作ったのだが、こどもあろうに縁起の悪い歯が33枚の櫛を作ってしまった。おつなの使いが家に帰れるよう取計らうが豊之助は首を縦に振らない。なかなか家に帰れないおつなは、とうとう自分から豊之助の前に姿を現すが…

### ◇丸知亜矢プロフィール

ちあとら〜(Театран)代表。学術博士(Ph.D.)。ロシア演劇大学(GITIS)を日本人で初めて俳優・演出学部を卒業し、国立アカデミーマールイ劇場、チャーホフ記念モスクワ芸術座などで一流の演出家に師事、ロシア国内にて演出家、俳優として活躍後、現在は日本を拠点に活動。ロシア古典演劇から、現代劇に至るまで幅広く翻訳、演出。日本とロシアの演劇交流をはじめ、スタニスラフスキーシステムを基礎とした演技指導に定評がある。

### ◇出演者

安藤あん  
鹿子嶋寛子 (ちあとら〜)  
ドタコウジ (ちあとら〜)  
まね (ちあとら〜)  
吉田光祐 (room16)  
若原啓子  
他

## ○実行委員会

岡田一彦、小熊ヒデジ、金子康雄、木村繁、久保田明、齋藤敏明、はせひろいち、丸知亜矢、右来左往、森秋音、油田晃 実行委員長・菊本健郎